

PA-013

回復期病棟における看護師と介護福祉士のパートナーシップの現状

飯山赤十字病院 看護部

○藤澤 弘美、春日 かほる、岡本 一美

〈はじめに〉 当病棟では、看護師と介護士が「協働」を発展させ、同じ患者を受け持つペア受持ち制（以下パートナーシップとする）を導入して患者の社会復帰を効果的に達成しようとしている。しかし、病棟業務が忙しすぎてパートナーシップが充分に行なえていないというスタッフの声があった。そこで第一ステップとして今回は看護師と介護士のパートナーシップの現状を知り、問題点の抽出と改善点の考察を行うこととした。

〈結果・考察〉【受け持ちに対する双方の思いがすれ違っている】介護士は専門職として前向きに働きたいと思っている、看護師は専門職として自分が頑張るべきと思っている、の2つのコードから構成されていた。【専門職として介護業務を充実させる】専門職としての対応・働きかけをしてほしい、介護記録を残す、スキルアップをしてほしいの3つのコードから構成されていた。現在の受け持ち体制では、〈パートナーシップ〉という形での関わりができていないと感じている部分があった。関わりえない理由として、【双方の関係が同等でないと感じる】【介護士の職種に対する理解度に差がある】【病棟の業務体制によりお互いの関わりが不足している】という現状もあった。【受け持ちに対する双方の思いがすれ違っている】ことや【病棟の業務体制によりお互いの関わりが不足している】などから双方が話し合えるチーム会やカンファレンスに参加し、お互い専門性が発揮しながらの意見交換ができるような環境を確立していく必要がある。そのためには看護と介護の業務内容を明確にし、互いの役割を理解する必要があるのではないかと考える。また、パートナー同士の役割分担を決めることで責任が生まれ専門職としてのやりがいがあるのでないかと考える。

PA-014

「院内看護実践報告会」の功績と課題

大阪赤十字病院 看護部

○松生 恭子、甲斐 登志子

【はじめに】10年前のA病院看護師は、看護研究に取り組むことに困難さを感じ、自分たちの看護実践を学術集会や研究会などで発表することに消極的であった。そこで看護部では、看護研究や院外での実践報告症例を増加していきたいと考え、「院内看護実践報告会」を平成17年度から毎年開催した。その結果、看護師の意識に変容が見られ、看護研究に取り組もうとしたり、院外での看護実践報告数も増加していった。

【経過】年1回の開催で日程は平日の夕方2時間、演題は5題、参加人数43名という小規模な会から始まった。継続できるように演題募集を根気よく働きかけ、日程を休日一日に変更したり、優秀な演題を表彰するなど、開催方法を工夫してきた。そして平成20年度のキャリア開発ラダーの導入の影響もあり、積極的に参加する看護師が増加してきた。平成24年度には演題数も60を超え、参加者も約180名となった。しかし、演題数は増えたものの内容は未熟なものが多く、平成25年度から査読を実施し質の向上に取り組んだ。また、口演・示説以外にワークショップや交流集会を企画し、現状の課題を解決したり部署での看護技術を紹介したりした。

【結果】これまでに9回「院内看護実践報告会」を開催してきた。部署全体で取り組むようになり、看護師の一体感・達成感も生まれた。自分たちの看護実践をまとめることに意欲的になり、「院内実践報告会」で発表した演題を院外の学術集会などで発表する者も増えた。また、院内で実践している看護を共有することができ、看護実践力の向上にも役立っている。今後は質を担保し、自分の言葉で看護を語れるような企画を考えて、「院内看護実践報告会」を魅力のあるものとしていくことが課題である。将来的には、多職種と合同で院内実践報告会を開催できるようになることも期待している。

PA-015

人工呼吸ケアの統一に向けて体験型学習を取り入れた教育的取り組み

高知赤十字病院 救命救急センター病棟

○小野川 愛

【はじめに】集中治療領域において、人工呼吸ケアは日常的に実施されているものである。しかし臨床現場においては、新人や新規配属者に対する教育が中心で、中堅看護師やベテラン看護師に対する教育は実践的なものはなく、机上でのものばかりであった。また、知識や経験が豊富なベテラン看護師も、気管吸引など人工呼吸ケアの技術には個人差があり、統一したケアの提供ができていたとは言いがたかった。そのため、新人や新規配属者だけでなく、全スタッフの人工呼吸ケアに対する知識や技術の統一を図ることで、実践能力の向上に繋げることができると考え、体験型学習に取り組んだ。

【方法】ICU看護師42名を対象に、NPPVの実践的使用方法、人工呼吸管理中の加温加湿と気管吸引、呼吸音の聴取方法について講義と実践を行った。講義は共通した資料とスライドを用いて教育レベルの標準化を図り、実践は全員が体験できるように小人数制で行い、終了後に無記名でアンケートを実施した。

【結果】講義では知識の再確認を図ることができた。実践では、NPPVマスクの正しい装着方法を実施したり、気管吸引は吸引モデルを使用して可視化することで、自分自身の技術を振り返ることができた。そして、呼吸音については経験豊富なスタッフが副雑音の分類を知らなかったが今更聞けないと思っていたので良かったといった意見が聞かれ、すべてにおいて臨床に活かすことができるといった結果だった。

【考察】気管吸引やNPPVのマスク装着など人工呼吸ケアに対して、これまで知識としては持っていたが、実践となると自己流となっていたスタッフの技術を見直すことができた。講義と体験型の両方を取り入れたことや小集団としたことで全員が実践することができ、より理解が深まり臨床に活かすことができると考えられた。

PA-016

CTCAEの適切な評価方法習得に向けて看護師へ学習会を行った有効性の検討

京都第一赤十字病院 看護部

○高木 歩美、小林 可奈

【はじめに】がん化学療法の有害事象評価のため使用されているCTCAEは、世界共通基準として作成された。先行研究で、“ばらつきの原因は判定基準の解釈の違いや、毒性基準の理解不足に起因すると明らかにされ、正しい毒性評価のためには、教育の実施とマニュアルが必要”であると結論付けている。

【目的】CTCAEの評価基準について看護師26名へ学習会を行い、前後での模擬評価テスト、アンケートを元に学習会の有効性を検討する。

【方法】学習会前後で模擬患者を用いた模擬評価テストを行い、前後での正解率を比較した。有害事象の評価内容は「嘔吐」「悪心」「倦怠感」「神経症状」「筋肉痛」「脱毛」「口内炎」「便秘」「発赤」の9項目とした。学習会後に実際の患者に有害事象評価を行った上で、認識の変化をアンケート調査した。

【結果・考察】学習会前後の模擬評価テストの結果、上記9項目のうち「口内炎」を除く8項目において10～56%の正解率の増加を認めた。「嘔吐」「脱毛」は回数や脱毛範囲、「便秘」は具体的な評価基準があるため、正しい知識を提示することで正解率増加に繋がった。一方で、「倦怠感」「悪心」は主観的な訴えを他者が評価するには限界があり、評価が困難であるとの意見も聞かれた。複数の医療従事者が客観的に見て共有できる情報を患者から引き出し、評価を行うことが大切であり、「悪心」「倦怠感」は患者の訴えが評価する上で重要である。評価基準を知り、医療従事者同士で情報共有することは大切であり、基本的な知識の習得、評価基準の共通理解に関しては、学習会を行う有効性は十分にあったと言える。

一般演題
(ポスター)
10月16日(木)